

柴犬の原発性緑内障

「イヌの緑内障を診断する方法及びキット」(特許番号6053681号)



緑内障

眼圧の増加により、網膜神経細胞が障害を受けて失明する疾患です。環境性と遺伝性があり、半数が遺伝性とされています。

発症年齢

4歳以降

変異遺伝子保有率※

柴・豆柴の場合 67.0%

※2016～2020年で検査した株式会社VEQTA のデータより。変異保有率とはキャリアもしくはアフェクテッドと診断された頭数を検査した全頭で割った時の割合です。

柴犬の原発性緑内障

緑内障の遺伝子検査を行うにあたり、株式会社VEQTAは麻布大学と株式会社メニコンが共同保有する特許「イヌの緑内障を診断する方法及びキット」（特許番号6053681号）の独占実施権を許諾する契約を締結しています。

リスク（低）

株式会社VEQTAが調べている遺伝子変異が原因となる原発性緑内障に関しては、**発症する可能性が低い**です。

リスク（中）

株式会社VEQTAが調べている遺伝子変異が原因となる原発性緑内障の**発症リスクがやや高い**です。

状況と症状に応じて獣医師に相談して適切な治療・処置を行ってください。

予後を大きく左右するのは治療開始までの期間と言われているため、定期的な受診をお勧めします。

リスク（高）

株式会社VEQTAが調べている遺伝子変異が原因となる原発性緑内障の**発症リスクが高い**です。

必ず発症するということではありませんが発症リスクが高いため、リスク（中）と同様、状況と症状に応じて獣医師に相談して適切な治療・処置を行ってください。

予後を大きく左右するのは治療開始までの期間と言われているため、定期的な受診をお勧めします。

緑内障は2種類の変異を合せて診断するので、**劣性遺伝病とは異なるリスク判定になる診断法**です。
リスク低・リスク中・リスク高で判定します。

交配組み合わせについて

● 推奨する組み合わせ	リスク低—リスク低 / リスク低—リスク中
▲ 推奨しないが許容組み合わせ	リスク中—リスク中 / リスク高—リスク低
× 避けるべき組み合わせ	リスク高—リスク高 / リスク高—リスク中

緑内障は痛みを伴う緊急疾患であり、早期発見・早期治療が重要です。
遺伝子検査によるリスク判定により、動物病院で早期発見・早期治療が可能です。

【緑内障の急性期症状】

結膜と上強膜のうっ血、眼瞼痙攣、疼痛、散瞳などが見られます。

1, 2週間この状態を放置すると視覚を消失します。